

日蓮主義 信行要本

和紙折本新かな附
並製一部金拾參錢
上製一部金貳拾六錢
送料貳錢

聖日。勸請。修法順序。廻向。

方便品。壽量品。自我偈訓

讀。修法用心聖訓之章。跋

文。

播州印南郡西神吉村

發行所 妙信寺

廣告

本會夏期講習會を七月二十三日より三十日に至る一週日間東京市淺草區北清島町統一閣に開く講師は現代日蓮主義鑽仰の諸名士十數名を集む名士及講題は次號に掲載すべし

東京天晴會

統一

第 二 百 八 十 號

日蓮上人の主義に就て

國友日斌

我宗信仰の基礎

野老乾爲

予の宗教觀

本多日生

汝等諦聽

山根日東

近代の主義と日蓮上人

三上義徹

雜纂



●聖日蓮鑽仰の善男女に告ぐ

天晴會第三回夏期講習會左の日時場所に於て開會

一會場 淺草北清島町統一閣

一時日 七月二十三日より二十九日に

至る一週間（毎日午後六時より十時まで）

一講師 天晴會々員中深く日蓮主義を

研鑽せる本化先覺者十數名

右聽講希望者は住所氏名を明記し會費を添へ本會事務所に申出られたし

一會費は金一圓（學生金五十錢）を納むること

淺草北清島町統一閣中

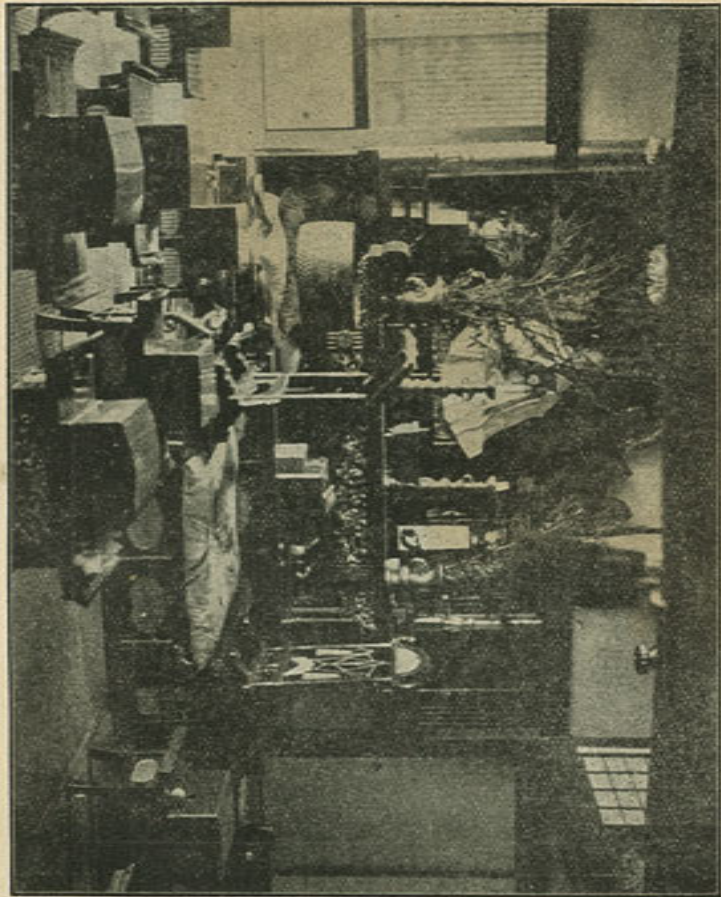
天晴會夏期講習會

事務所

講師

(いろは順)

大僧正	本多日生君
僧正	脇田堯惇君
權僧正	松森靈運君
文學士	小林一郎君
文學博士	幸田成行君
文學博士	姉崎正治君
海軍大佐	佐藤鐵太郎君
文學博士	三宅雄二郎君
文學博士	三上參次君
唯一佛敎團長	清水梁山君



(草木大なる奉し置安に閣一統)

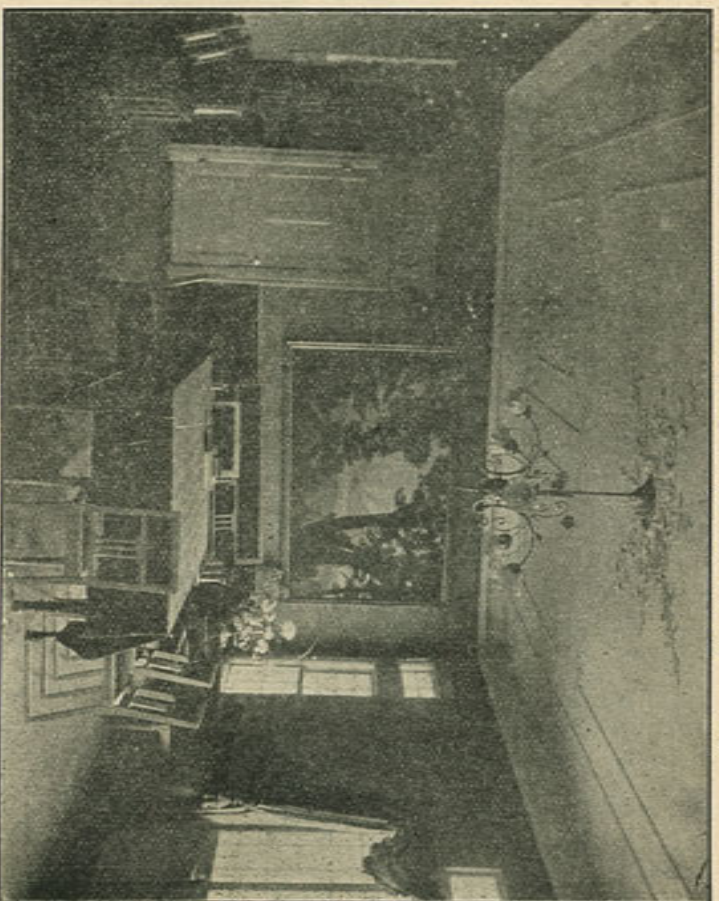
觀心本尊抄に云く

其本尊の體たらく、本時の娑婆の上に寶塔空に居し。塔中の妙法蓮華經の左右に釋迦牟尼佛多寶佛、釋尊の脇士上行等の四菩薩文殊彌勒等の四菩薩は眷屬として未座に居し、迹化他方の大小の諸菩薩は萬民の大地に處して雲客月卿を見るが如し、十方の諸佛は大地の上に處し給ふ。(縮遺文) (九四〇頁)

報恩抄に云く

日本乃至漢土月氏一闍浮提に人ごとに有智無智をさらはず、一同に他事をすて、南無妙法蓮華經と唱ふべし。(縮遺文) (一五〇九頁)

(森ノ旭畫壁室接應上樓閣一統)



(畫者 丁原 室小員會)

「八皇八十九代後深草天皇の御代。建長五年四月二十八日の曉天。安州清澄山頭
旭の森に登り。東海遙かにさし昇る旭日にむかはせられ、清き教ひの大梵音を
振ひたまふて。始めて南無妙法蓮華經々々と唱へ給ふ。是で、教團宗の大興也。
御歲三十二。」

去ぬる建長五年大歲癸丑四月二十八日に安房の國長狹郡の内
東條の郷今は郡なり。天照太神の御くりや。右大將家の立て
始め給ひし日本第二のみくりや今は日本第一なり。此郡の内
清澄寺と申す寺の諸佛坊の持佛堂の南面にして午の時に此法
門申しはじめて今に二十七年。(聖人御釋抄)
(總遺)八七五頁)

又云く

然るに日蓮は何の宗の元祖にもあらず又末業にもあらず。乃
至日本國の中に但一人南無妙法蓮華經と唱へたり。これは須
彌山の始の一塵大海の始の一露也。二人三人十人百人一國二
國六十箇國已に島二にも及びぬらん。今は誘せし人々も唱へ
給ふらん。(抄書)

予の宗教觀

本多 日生

此度、統一閣の落成に就きまして三日間に渉る開堂
の式を擧げることゝなりました、既に昨日は、純粹な
る信仰を中心として、莊嚴なる法廷と日蓮主義の宣傳
を以て、終りを告げたのでありますが、本日は昨日と
は異つて、苟も上人の主義と人格に對し、敬意を表す
る人は、皆來つて此席に列することを得ることゝな
つて居るのであります、それで吾々の日蓮上人に對す
る鐵仰敬慕の考へは、從來の多くの宗教の取り來つた
意味とは、其内容は非常に違つて居るのであります、
今迄での多くの宗教の信仰は、直ちに現在の感應利益
を祈つて、今日を渉る上に於て人間以上の力を求めん
とするか、若しくは、死後の成佛得脱を願はんとする
か、是等の考へが多くの信仰の中心となつて居つたの
であります、常に其信仰は二つの方向を取つて、道德
と宗教との關係、及び道德の基礎を示して、廣く人生

の妙美を味ふ爲には缺くべからざるものであると云ふ
肝心な處は悉く忘れられて了つて居つたのである。

今日と雖ども人生全體の慰安と幸福の爲めに又實際
生活を指導する爲めに、と云ふ眞に宗教の生命の存す
る處を自覺して居る人は殆んど少くないのであります
そこで宗教と云へば、不健全なる病的不具者に於て必
要であつて、健全なる生活者には、宗教は何の必要は
ないといふことになつて了つて、眞に宗教の精神は地
を拂つて廢顏して居るのであります、更に他の方面よ
り觀察をしますれば、宗教は吾人の理性の上にも満足
を與ふるものであるといふことも忘れられて了つて、
只傳來の言説によつて獨斷的に宗教を疎して居るか、
さなくば只先祖傳來であると云ふ様な處より、ボンヤ
リ、頑迷固陋なる信仰に入つて居るものが随分多い様
である、之等のものは今後の國民感化の上には最も嚴
格に革めなければならぬと思ふ、無論宗教は理論でな
いから、理屈に流れては返つて宗教を没却するが、然
し乍ら頑迷固陋なる信仰に至つては、取るに足らざる

(2)

ものであつて、寧ろ之が滅亡を祈るは刻下の最大急務であると思ふ、宗教は吾人不滅の生活に入らんとすることを教ふるものであるが、中には未來に偏したるものも少なくない、未來を教ふることは至極結構であるが夫れと同時に亦現實を適當に指導してゆくことを教へなければならん、完全なる宗教は必ず未來と同時に亦現實生活と調成せられて居るのである。

少くとも我日蓮主義信仰の意識中には必ず是等の關係は明了になつて居らなければならんと思ふ、日蓮主義は凡てこの問題を捕へ來て悉く之に其基礎と生命を與ふる主義であるから、道德の研究者も、真理の研究者も、皆此日蓮主義に來つて益々發揚の道を聞かなければならんであります、今日の會合も即ち是等の意味より生れて居るのであります、更に明日は通俗教育を旨として、訓育講演もあれば、趣味娛樂の講演もあり、凡て善良なる感化を與ふるものは皆取り來つて風教の改善に資せんとするのであります、而して此三日間に渉る會合の内容は、即ち統一團の社會に向つて

全く文明の理想と一致して居るのである、否たゞに一致するよりでなく、之を指導して行くべきものである、文明の理想と云ふても色々の方面があるであらうが、要するに智識の啓發に勉めて益々賢より實に進み真理の光明を發揮すると同時に、人をして一面善良なる徳性を涵養して行かなければならん、言葉を換へて云へば、智徳を調和し平衡して行く事が、眞の文明の理想であらうと思ふ。

更に他の方面には吾々の情緒を圓滿に發達せしめて生活を豊富にしなければならん、一つの花を見ても、其形に於て色に於て一つの葉の垂れて居るところに於て、更に其全體に於ても、凡て見るところに従つて、吾々は非常なる趣味を興へられるのである、吾々は各方面の趣味を多く有つて居るだけ、其喜びは多くなつてくるのである、文明の理想の中には、人の有する凡ての情緒を完全に發達せしめて、圓滿に諸種の趣味を解せしめるといふことも入つて居らなければならん、只衣食住の生活のみならず、内面より出で來る處の

(3)

活動せんとする理想を示したものでありまして、他の多くの開堂式とは大いに其趣を異にして居る所以であります。

今少しく此統一團の理想を語らんとしまして、私は『予の宗教觀』といふ題を設けたのであります、演題が大きい爲に其詳細を盡すことは出来ませんが、暫く吾々が、國力の發展と世界の平和の爲に盡さんとする思想の一端を述べて見ようと思ひます。

私は宗教萬能主義を唱へる者でない、宗教の經典を以て、政治も教育も裁判も風俗も凡てを律せんとする様な窮屈な宗教を持たないのである、多くの人が宗教は人生の一隅に住して居るものであると云ふが、或は一面から見ればさうであるかも知れない、が然し宗教は其の狭い様な處に最も廣い意味を有つて居るのである、親の年忌に寺詣りをして、始めて宗教ありとする様な、又病氣に取りつかれて、御祈禱の爲に始めて必要であるとせられる様な、そんな宗教は所謂予の觀る處の宗教でない、予の尊んで居る宗教の目的理想は、

凡ての光を放つといふことが、眞の文明の理想なのである、處が今の文明は此注文に契つて居るかどうか、餘りに物質に傾いて居るのではあるまいか、吾人の物質上の欲望といふものは、漸次に産生し來るものであつて、止まる處を知らないものである、一つの衣を得たなれば、又一つを要求し來つて、殆んど限りがないのである、限りのある物質を以て、限りのない欲求を満足せしめるといふことは出来ない、此の進歩的にして無限の欲求に勝たうとすることは、月と競走する様なものである、世界の凡百の物を一人りて所有にしても尙満足するものでない、如何に文明の利機が多くを産するといふとも、此欲求に打勝つことは到底出来ないものである。

然らば此欲求は如何にしたならば好いか、生物である以上は此欲求を打破して終ふ譯にはゆかない、我の存する限りは此欲望も存するのであるから、總ての欲望を適當に調和發達せしめて、其生活の範圍をより以上に豊富にして行くと同時に、欲求の究極せる處迄到

達せしめなければならん、即ち絶対の欲求によつて成立せる境地に迄、吾人の欲望が亢進するなれば、そこに凡ての欲望は悉く満足せらるゝのである、而して精進と満足とは適當に調和せられて、凡てのものに向ひ喜びを有つて接することが出来る様になつてくるのである、止まる處を知らない物質の欲望は必ず精神の喜びに遇はなければならぬのである、今の文明は尙片輪の文明であるが、理想の文明は前述の如くなつて現はれなければならぬと思ふ。

彼能施太子が龍王海より採り來りたる寶玉を何人にも與へたといふことであるが、其實玉とは何を意味して居るのであらうか、即ち法の玉であつたのである、精神上の悦の寶であつたのである、吾々は精神の中に此光りある悦びの玉を得るなれば、苦痛の中に於ても悦びを以て處することが出来るのである、此精神の悦びを得なければ、永久に満足の域に入ることが出来ないのである。

佛陀が「一切衆生の異の苦を受くるは皆是我苦なり」

親しみ、相樂しむといふことは、我陛下の常に軫念あらせらるゝ處である、諸君は、共に此光榮ある日本臣民たることを喜ばなければならぬ。

若しも日本臣民にして生活を厭ふ思想を生したりとすれば、一日たりとも見通すことの出来ない由々しき大事であるが、常に懷疑の雲に鎖されて、不平煩悶を洩らすと云ふことは己に健全なる國民でない、健全なる國民とは懐意相誠め自彊息まずと仰せられた團結でなければならぬ、即ち智能は啓發せられ、徳器は完成せられ、此二つが相並んで活動するなれば、之れ以上の美觀はあるまいと思ふ、眞善美の調和發達と云ふのは即ち是である、如何なる一點を捕へ來らうともそこに微妙に調和せられて居らなければならぬ、丁度、世話女房が誠を以て其夫に仕へる處には、そこに即ち眞善美の現はれて居る様に、眞に文明の理想には必ず眞善美は一致せられて居らなければならぬ。

(5) 繭つて從來の宗教は如何なる状態であつたか!! 只經典より讀んで居ることは、健全なる宗教でない、必ず

と云はれ、又、「能く衆生をして歡喜の心を發さしむ」と謂はれたのは、精神上の悦びを與へて、凡ての苦痛を離れしめんとせられたことに外ならぬのである、千人居らうが萬人居らうが、知識の程度を問はず、一切平等に絶待の喜びを與ふるものは、獨り宗教の力あるのみである、昔に於てもこれ位のことには充分に了解せられて居つたのであるが、今日に於て多くの人が之を知らないと思ふものは、今の文明が尙萎靡して居るからである、必ず健全なる文明には知識の進歩と共に、善良なる徳性を發達せしめなければならぬ、畏くも教育勸語に、「知能を啓發し徳器を成就し」と仰せられてあるが、智能の啓發は何が爲めであるか即ち誠意を發動せしめんが爲である、徳器の成就といふことを外にして、只智能を啓發することは恐らく、陛下の思召であるまいと拜察しまするのである、儒教に於ては、誠に天地の道なりといふてあるが、鬼神と雖も此誠を退くることは出来ないのである、人は誠の爲には泣きもすれば、喜びもするのである、吾々此誠を以て同胞相

健全宗教の信仰の中には、凡てを包容して吾人を満足せしむるものがなければならぬ、此意義に於て政治と一致し、道徳と調和せられて、而して真理の頂點を握つて出現せる宗教でなければ、完全圓滿なる宗教と云ふことは出来ないのである、教育とは相容れず、道徳とは衝突し、政治とは離れて、獨り宗教は宗教の世界に存して淋しく木鼠に耳を澄まして居る様な宗教は己に文明の宗教でない、眞に完全なる宗教は、政治も道徳も哲學も如何なるものも之を包容し來つて、生ける力を與へて再び之を活躍せしむるものもなければならぬ、法華經の方便品を拜すれば、「佛は智慧第一の舍利弗に向つて、諸佛の智慧は甚深無量にして其智慧門は難解難入なり」と謂はれてある、而も是が法華經の皮切りに於て佛陀の智慧は天地を貫きたる真理であつて此智慧に照されたる諸法は十如三千の妙體となつて現はれて、世間の相は一つも捨つべきものはないと示されてある、更に進んで此智慧を收めたる佛は壽量品の上には慈悲の本佛と現はれ、毎に慈悲救済の活動は今

尙吾人の頭上に輝いて居るのである、此久遠の佛陀の
 上には、教育の淵源も、道徳の本質も極めて圓滿に現
 はれて居るのである、此佛陀の慈悲が吾人の頭上に下
 つては、『能く世間の苦を救ひ世間の樂及び涅槃の樂を
 與ふ』といはれてある、決して病氣の時丈けに於て、
 佛陀の慈悲は下つて居るものでなくして、信仰の心田
 には常に佛陀は其影を宿して、吾人を指導せらるゝの
 である、此信仰生活に於て始めて、喜びあり満足ある
 生涯を送ることが出来るであらうと思ふ、如何に金の
 山を築かうとも、信仰の生活に入らないものは常に人
 生の苦痛と煩悶を醫することは出来ないものである、世
 には我子に財産を譲らんとして、金のあるが爲に却つ
 て之によつて内面の苦痛を増してをる人が少くないの
 である、物質の生活は、來つて必ず喜びの生活に入ら
 ない間は、不満の境遇を去ること出来ないものである、
 人は此信仰の生活に入つて、境遇の間に人間とし
 ての果報を樂しむことが、最大の幸福であらうと思ふ
 勞働者は勞働者、軍人は軍人、學生は學生、各々其生

活の間に常に喜びと満足を以て一日を送り、其爲すべ
 きことに奮勵努力し、そこに刻々愉快を發見して行く
 とが出来ないものは眞に偉大なる者でない、眞に偉大
 なるものは常に満足と悦びを有つて發展向上して居る
 のである、佛陀の教も日蓮上人の遺訓も、皆之れ吾人
 の心に喜びを開拓して益々奮勵と努力の力を振起し、
 現在と共に無限の向上發展を促されたものに外ならん
 釋迦牟尼佛の世に出現せられて、有ゆる迫害に打ち勝
 ち、終に八十にして涅槃の雲に入り給ふに至る前半生
 は、眞理の光明に向つて進まれ、後の半生は一切衆生
 に世間及び涅槃の樂を與へんとして、孜孜として慈悲
 の活動を續けられた、其勇氣の凜然たる生涯を見るな
 らば、吾人は亦奮然として喜びの努力を續けなければ
 ならん。

佛教は決して眞理の探究を避けんとする宗教でない
 法然の如く親鸞の如く、毛蟲の様に眞理觀を嫌つて、
 唯淨土の安賣を呼ばはる様な宗教は、獅子身中の虫で
 ある、天台の一念三千の觀法を見るなれば、如何に佛

教の眞理觀は畢生の心血を注いだことを窺ふことが出来
 るであらう、日蓮上人は、華嚴であれ眞言であれ、悉
 く之を取り來つて、法華經の見解より眼を與へ、天台
 の一念三千を採り來つて其欠點を補ひ、事之一念三千
 を立てられて居る、日蓮上人の信仰は凡ての智識の上
 に嚴然と動かざる絶待の信仰である——。それであ
 るから、上人は仰せられてある、『一念三千ヲウラス、
 キテ立タル大曼荼羅ナリ』とこれが即ち日蓮上人の獨
 り尊い所以である、人類の理性上の満足迄も、純乎た
 る信仰の中に於て、微妙なる調和を與へられたる宗教
 は世界に於て其類を見ない、『一闍浮提に人ごとく、有
 智無智をさらはず一同に他事をすて、南無妙法蓮華經
 と唱ふべし』上人は自ら此解釋に筆を取られてあるの
 である。

カワウツ(川獺)といふ獸は魚を常食として生きて
 居るさうであるが、自ら其恩を知つて、時に其魚をと
 り來つて崇むと云ふことである、日蓮上人は、新池御書
 に於て、傳教大師の御釋を引かれて、『川獺祭魚のこゝ

ろさしあり、林鳥父祖の食を通ず、鳩鶴に三枝の禮あ
 り、行雁連を亂さず、黒羊踞て乳を飲む賤き畜生すら
 禮を知ること是の如し、何ぞ人倫に於て其禮なからん
 や』と當時の佛教徒にして尙人倫の常に亂れたるを御
 覽になつて、『是天魔飯句のふるまひ』なりと、赤心そ
 の行爲を懲れられて居る、是等の御遺訓を拜する度毎
 に、如何に上人の信仰が微妙に發達せるかを三省せざ
 るを得ないのである、眞理觀の上より見ても、人倫道
 徳の上より眺めても、又健全なる國家觀念の上よりし
 ても、如是調和せられて、而も其全面に向つて麗はし
 く現はれて居る信仰はないのである。

上人の道徳觀國家觀は實に我國の譽れである、又上
 人が此心地に住して常に喜びの奮勵を續けられたとい
 ふことは益々吾人の激勵に力あるものである。

上人が到る處は身延の山中にしても、佐渡にしても
 悉く靈山淨土と化して、微妙の音楽は響いて居るので
 ある、身延山御書を拜すれば、『天竺の鷲峰を我朝此岡
 に移し置きぬ』と

上人の御眼に映る身延山は即ち天竺の靈山淨土であるとは、如何に其心境の澄めるかを窺ふに足るであらう、斯の如き信仰の悦びは、獨り上人の信仰に於て見ることが出来るのである、精神の喜びは、物質の犯す能はざる處である、如何なる富貴に處しても、如何なる貧賤に處しても、其喜びの現はれは常に同一である信仰の現はれは常に如是でなければ、眞に圓滿なる宗教信仰でないのである、換言すれば、眞理、道徳の上に確立せる信仰でなければならぬ。

文明の理想は已に前述の如くであるが、理想の宗教も亦如是でなければならぬ、而して文明の理想と宗教の理想とは同一である、兩者は實に如斯にして、始めて之を名けて眞の文明といふのである。

今日の如く理想の渾沌たる過度期に於ては、文明の理想を語り、理想的の宗教を示して、速に其歸する所を明にしなければならぬ、吾々は是等の凡ての問題は獨り日蓮主義に於て解決せられたりと信ずるのである而して此日蓮主義を標榜して大に天下に宣傳せんとす

我が宗信仰の基礎

野 老 乾 爲

私は京都に居ります一人であります、今日此盛大なる統一閣の開堂式に臨み得たるは、甚だ光榮とする所であり、過日來、少し病氣の爲め咽喉を痛めて居ますので、充分なお話しは出来ません、唯ほんの挨拶に代へて一言申述べざる考であります。

佛陀の在世に於ては種々なる出來事がありました、或一人のものがあつて、東京の如き繁華なる市街を歩いて居た所が、一の珍しき寶物を拾つた、彼は平素極めて正直にして潔白なる精神を有つて居ましたので、拾つた物を其儘自分の所有とし、何等かの方法に依り、之を天下公衆の爲にしようと思ひ、天竺(今の印度)全體の中に最も貧窮せる者に此無價の珍寶を與へんと披露したのであります、然るに其廣告を見て集ひ來れる者其數幾萬人、されど最も貧窮なる者は開んに澤山ある筈ではない、日本にも貧乏の者は随分少

るのである、勿論日蓮主義の中にも種々なる小義の分裂を生じて居るが、此統一閣に於ては是等の死せる派別の見解を打破して、公平なる日蓮上人の信仰を奉戴し、正々堂々と宗教の革新を圖り、進んでは文明の理想に突進せんとするのであります。

種種御振舞鈔に曰く

日蓮によりて日本國の有無はあるべし、譬へば宅に柱なければたまたず、人に魂なければ死人也。日蓮は日本の人の魂也。(繪圖遺文録 千四百三頁)

くないでせうが最も貧窮者は其中に一人しかない筈であります、然るに無價の寶物を得んとする貧窮者は、幾萬の多きに達した、蓋し之れその時代の人々の精神如何を表白せるものでありませう、此に於てか彼は、集れる貧窮者に其寶物を與へずして、之を國王に獻上した、そして國王は最も困難せるものは居ない、何かといへば國王は如何に多くの財寶を有するにせよ他より持ち來れるもので自己自身の物とは云へない、幾何多くの財寶を羅列するとも眞に自己の所有でないならば満足すべき理はない、天竺に於て最も困難せる者は即ち國王である、故に自分は此珍寶を國王に獻上すると言つた、此れは、佛在世に於ける一話柄であるが、人は精神上の富にあらざれば眞に満足を得ることは出来なといふ意味を表はせる話であります、吾人は如何にして其富を得満足し得らるゝかといへば、意義ある信仰と活ける人格とに依らねばならぬと信ずるのであります、故に私は今我が宗信仰の基礎と題し、之に就て私の信ずる所を述べようと思ひます。

私は立派な活ける信仰を體現し、活ける人格の上に信仰の根底基礎を認めなければならぬと思ふ、日蓮聖人の教、日什上人の訓は即ちそれであり、日本に於て日蓮聖人を仰げる者は少くない、今私は日什聖人の教に就て、其仰ぐ所の根底を認めんとするものであります。

日什上人は日蓮聖人の滅後三十二年に當り、會津若松に生れ給ひし大教傑であります、十九歳にして京都比叡山に登り、慈遍僧正に就き、研學精練すること殆んど四十年、其間(三十八歳の時)に擢んで山門の學頭となり、衆望いや高く師の風を慕はざる者なく、稱して能化と仰ぐに至り、五十八歳に至るまでの廿年間には三千の學徒を策勵せられてゐたのであります、當時比叡山は非常なる勢力を有して、全國に於ける佛學の根本道場であつたのであります、日蓮聖人も曾つて此山に於て佛敎の蘊奥を研激せられた、日什上人が其間に於て最も苦心せられたことは、天台の主義が果して末法現代の迷闇界を照破し得るだけの光輝を有せる

書に依つて悉く了解された、此に於て自分は以後直に聖人に歸依し奉り、直弟たらんとする者であると、其御書を拜すること活ける聖人の人格に接したる如く、自ら名を日什と改められた(もと玄妙と稱す)日什上人が開目抄を拜せられたのは、普通の人が一二卷の書を讀んだのとは異り、天台の教義の奥底を極め、佛敎諸宗の要義を研激せる大學者でありまして、其徳高く行勝れたることは實に教界に其比無き偉人であつたのであります、然るに奮然として天台の信條を捨て、日蓮主義を提げて國家の爲め、一切衆生の爲め、身に弘法の重任を帯びて起たんと決心せられた、此時之を聞き知つた人々の驚愕は如何ばかりか、天台宗の衆僧謂らく、師の改宗は一宗の典廢に關すると、無禮にも遂に日什聖人を開殺せんと謀つたのであります、此時日什上人は少しも其事を知らなかつた、其愛弟に善如なるものあつて彼等の悪計を師に告げましたので、共に羽黒山を竊かに逃れ、道なき所を忍び出で、山の中腹に洞窟があつたのを幸ひとして、暫時そこで夜露を

や、此の疑念の曇を拂はんとするには幾たびか煩悶し反省し、遂に古郷の會津に歸らんと決せられたのであります、會津に歸郷せられてからは、別に學校を開かれたのではないが、豫ねて暮へる師の歸郷を聞き知り、其の教を受け説を聽かん爲め、笈を負ふて來り請ふ者殆んど五百名の多きに達したといふことであります、此時不思議なことがあつた、即ち末法の迷闇を照破すべき、日蓮聖人の佐渡在島中心血を注がれた開目抄上下二卷を閲みし給ふを得たのであります、その活ける文字、偉大なる主義に接した什師は、幾星霜の疑問を一時に氷解し、此に一縷の光明を認められたのであります、實に什師の悦びは手の舞足の蹈む所を知らなかつたのでありませう、私は一昨年日什上人の靈跡地たる會津の羽黒山に登り不覺に上人當時の有様を追懐しました、師は齡既に六十七歳にて開目抄を感得し、其夜更けて人皆眠に就くを待ち、立派なる祭壇を造り之れに開目抄を奉戴し、涙を流し潜然として云はれるには、六十年間の疑ひは今末法の現代に光被すべき日蓮聖人の御

凌がれて居た、遂に日出山又次郎の外護を受け、其家に住み給ふこと數月の間でありました、日蓮聖人は法華經の大法を宣傳せんとして幾多の迫害に遭遇せられたが、聖人自らは勸持品の豫言に符合せるを喜び、寧ろ信仰の熱度を高められたのであります、什師亦正法光顯の意を決せらるゝに當つて危難を加へられんとせられたが、日蓮聖人の人格を仰ぎ主義を信する精神は一層深くなつたのであります、爾後、奥州より京都へ往復せらるゝこと凡そ十八回、或は公家に奏聞し、或は武家を諫曉し、遂に京都六條傍門に小庵室を構へられた(妙塔山妙満寺は之が始めであります)其時

心はすまん堀川の水

と詠まれた、古郷より帝都に幾度か往復されたが、年既に七十有八歳に暨び、三度び天下を諫めて容れられざれば退くは聖賢の道であるから、是程迄國家の爲め正義の道を弘めんとしても聽されなければ止むに如くはない、然し假令我が身は如何なる處に於て死に果つ

るとも、正法の光は我が至尊陛下の御稜威と共に滅することはない、といふので、此詠歌を残して帝都を辭し給ふたのであります、而して足柄山を越へ古郷に歸られし時

未急く駒の足柄山越へて

富士をやあとにかへり見るらん

と詠まれたが、此歌の意味は吾人が幾度も繰り返して味ふべきものであります、即ち富士といふは單に富士山のみを指したのではない、其意は確かに日本萬世一系の天皇陛下を指し奉るのであります、什師謂らく、自分は既に年老ひて何時世を去るか計られぬが、今遙かに京都を辭し、我至尊陛下の在ます京都を後に顧み遠く古郷に歸るのであるが、再び陛下の在します都に上つて龍顏を拜し上ることは叶はないのであらうか、而して富士の高く聳へて比なきが如き我が國威宣揚の美風と、ともに調和すべき此正法を宣傳する機會が無いであらうか、嗚呼絶對の權威と絶對の正法とが冥合するかを惜まれたのであります、即ち國を思ひ正法を

思ふて京都を慕はれたのであります、尙ほ、門に立ちもの乞ふ人の聲きかば

あはれと思へ施さずとも

といふ御詠歌があります、之れは佛陀大慈悲の意輪中より發動せるものであります、昨日私は上野公園に行きました、實に見るに忍びざる風采で往來の人に飛び付くばかりに頻りに頭を下げ食を乞ふてゐた、實に彼等は慙然たる者であります、少くとも人の情ある者は彼等不具者に對して憐みの心を起さぬ者はないでせう、多くの人は我富を重ねたならば人に施してやるといひますが、然し精神的の施しをする者は極めて掛い、宗教家は物を施す施さぬは兎に角、精神上に於て眞に大慈悲の心を有せなければならぬ、

以上三首の歌を列ねましたが、之れ吾人信仰の基礎となすべき教へであります、多くの人の信仰を觀察するに眞に根底ある信仰でない、或は自己の懐都合の爲めに信仰せる者もある、甚だしきに至つては何卒徴兵を免れる様にと神佛に祈願をかける様なものもある、

日蓮上人の主義に就て

國友 日斌

私の演題は「日蓮上人の主義に就て」といふのであります、今更事新しく上人の主義を論ずるなどは、已に諸君のお耳には古い事でありませうが、是迄聊か上人の主義に就きまして、自分の研究しました一端をお話致さうと思ひます。

近來日蓮上人の研究は非常に多くなりまして、各方面より熱誠なる研究の鋒先を向けて、各々日蓮上人に對する解釋を致して居られますが、今其一二を數へて見ますれば、日蓮上人の主義は積極主義であるといひ奮闘主義であると云ふて、各種の方面より種々なる見解が起つて居るのであります、今一言にして是等の諸説を評論しますれば、各々觀察の一面であつて、尙局外者の批評に過ぎないと云ひたいのであります、少くとも私の研究と其信する處より、是を申し上げますれば、曰く統一主義なりとより外に云ひ様がないと思

或は病氣がよくなる様に、或は金が儲かる様になどと祈つて居る、神佛は果して之を受けられるであらうか凡そ是等の信仰は根據なき信仰であつて、何等効驗なきは明かでありませう、而して斯かる信仰は遂に個人を墮落せしめ、社會を害し、國家を毒する恐るべき信仰であります、願くば、日什上人が六十餘年間苦心の結果、日蓮聖人の精神を籠めて書き顯はされたる一部の書に依つて、翻然として宗を改め正義弘通の大活動をなし、國家社會人類の爲に老耄猶ほ若者に優るが如き勇氣を以て、健闘せられたる信仰と理想とを慕はれ、活ける信仰に住し完全なる人格を發揮せられんことを希望する次第であります。

佐渡御勸氣鈔に曰く

本より學文し候し事は。佛教をさはめて佛になり。思ある人をもたすけんと思ふ。佛になる道は。必ず身命をすつるほどの事ありてこそ。佛にはなり候らめとをしはからる。(蓮道文録 七百一頁)

ひます。

古來佛教中に起れる異論或説は紛々擾々として、其何れに眞理の存するかは、殆んど捕へる事が出来なかつたのでありますが、日蓮上人の顕遷なる見解は、五千七千の經卷を統括して、佛教の歸趣すべき處を遺憾なく發揮せられたのであります、然らば八萬法藏と謠はれたる全佛教は、日蓮上人によりて如何に解釋せられたかと申しますれば、全佛教の淵源と其歸趣を、法華經に於て認められたのであります、日蓮上人は此法華經中心の炯眼より、全佛教を統一的に觀察せられて益々法華經の眞價と、全佛教の秩序整然たる生命を達觀せられたのであります、語を換へて申しますれば、上人の主義は統一主義であり、全佛教の達觀であり、此上人の主義は唯に佛教の統一主義のみでなく、有ゆる煩瑣なる宗教の見解も、悉く統一せられたる主義であると思ひます、又宗教と道德との關係問題の如きも随分議論の喧しい處であります、一度上人の主義の元に來たなれば明了に其解決を與へられて居るの

大日中心或は彌陀本佛論の如き佛陀論が生じて居るのでありまして、其由つて來る所はないではありませんが、是等は悉く佛教の正系を逸したる或説謬論であるといふ事に躊躇しないのであります、佛教の通論より致しましても、釋迦牟尼中心説は其正説を得たるものであると思ふのであります。

天台智者大師は大藏經を五つに區別して、五教部として居ります、其阿含方等に於ても、般若法華に於ても、何れも釋迦を中心として居るのであります、天台の分類しました五教部中の小乘阿含に於きましては過去現在未來の三世に涉る時間の中心に於て釋迦牟尼の本佛を光顯して居るのであります、即ち過去に於ては七佛を論じ、未來は五十六億七千萬歳の後に於て、彌勒出世の世界を認めて、其中間なる現在に於ては教主釋迦牟尼を中心として居るのであります、即ち三世に涉つて九佛を論じて居るのであります、吾々の救済主を論ずるに當つては、已に過去の七佛を追ふことも出来なければ、又徒らに未來彌勒出世の世界を

であります、斯の如き意味合ひより愈々上人の主義に名くるに統一主義と名ける事を最も適當であると思ひます。

由來上人の主義は統一主義であります、唯單に統一主義と呼んだ計りでは、餘りに要領を得すぎて却つて漠然として居る様に思はれますので、私は少く其内容に立ち入つて、時間の許す限り語つて見やうと思ひます。

廣漠なる佛教は其研究の方向に従つて、古來種々な議論を産み出して居るのであります、今暫く

(1) 佛陀論

(2) 佛性論

この二方面より考察して上人の統一主義を語らうと思ふのであります。

第一の佛陀論に就きまして大藏經を通覽致しますれば、大體に於て、小乘阿含の佛陀論より、權大乘教に入り、進んで實大乘法華經の佛陀論に終る、三段の變遷を認むる事が出来るのであります、勿論此間に於て待つことも出来ないものであります、勢ひ現在の衆生は現在の教主釋迦牟尼佛によりて救済せられなければならぬのであります、是は天台の見たる阿含であり、要するに三世時間の中心に於て釋迦牟尼を光顯せるものであると云ふ見解は、實に天台の卓識といはなければならぬのであります、進んで華嚴、方等般若の如き、權大乘教に於ては、空間的に十方に國土を認めて一々の國土に一々の佛ありとして、一佛國土を認めるのであります、無邊に連る十方國土に於て、此の娑婆世界に生存する一切衆生は、悉く此の娑婆世界の教主釋迦牟尼によりて、救済せられなければならぬのであります、是れは空間の中心に於て釋迦牟尼を認めたものであります、即ち釋尊は十方諸國土に活動せる無限の諸佛の中心であります、權大乘教の佛陀觀は斯の如く空間に其の中心を論ずるのであります。

然らば豈は三世に涉る時間を貫き、横には無邊の十方に涉る、其中心に於て獨り釋迦牟尼の絶待を認め

るものは、何れの經典であるかと申しますれば、大藏經廣しと雖も、法華經を外にしては是を見る事は出來ないのであります、法華經は小乘阿含の時間中心説と權大乘諸教の空間中心説とを、調和し來つて時空縱横に活動せる絶待本佛の釋迦牟尼を光顯したる妙典であります、今簡單に他の方面の觀察より法華經の意義を申しますれば、本佛教は其淵源を釋迦牟尼に發して再び釋迦牟尼に歸らなければならん様に、佛陀論も亦其中間に如何なる佛陀が横たわつて居らうとも、絶待中心の實在者は獨り釋迦牟尼の本佛論に來らなければならのであります。

私は二千幾百年來の史上に發生しました處の、諸種佛陀論を批評するに當りまして、一つの譬へを取りますなれば、私共が東京の様な大都會に於きまして、色々立派な建築物の間に逍遙して居ります時は、何れの建物も最も大なるものであつて、又高いのであるか、又其都會の中心は何處であるかといふ様なことは、殆んど想像だもすることは出來ないのであります、若し

釋迦牟尼たる偉大なる人格に接して居りました、在世の多くの人類は、餘りに其對照が偉大であつたが爲でありませうか、釋迦牟尼の全體を捕へ又其真相を窺ふことが出來なかつたのであります。

恰度、東京の様な大都會を離れて偉大なる黒い影を残す様に、其偉大なる人格は、滅後年を重ねるに従つて、日月と共に益々偉大なることを、意識せらるゝに至つたのであります。

同じ獨りの釋迦牟尼の口輪に現はれました、説法に於きまして、始め小大の諸乘に現はれて居ります佛陀と最後法華經に現はれて居ります佛陀とは、大なる差異を示して居るのであります、而して其生命を法華經と共にせられました日蓮大上人が、歴史の上に於きまして諸家の最後に現はれたと云ふことは亦偶然ではないと思ひます。

佛陀が此の世に在せし時には、多くの佛弟子は何事か煩悶苦痛を生じて疑問の起る度び毎に、直ちに釋迦牟尼の膝下に走つて之が解結を乞ひ、喜ばしきことも

し一度び汽車にでも乗つて、漸次に都を離れ遠かるに従つて、色々の形は次第々に消へ去つて了つて、最後に残るものは只偉大なる土地計りであり、又船に乗りまして海洋を横断せんとする場合に於きましても船の漸く港を離るゝに従つて、家も森も次第々に見へなくなつて了つて最後に微かに残るのは、日本最高の富士山でありませう。

が然し此大なる土塊と最高の山とは、決して吾々の經驗によりて始めて、高、大、なるものではありませぬ、其物自身は既に、經驗に先き立つて高大であつたのであります。

そこで吾々は、其中心とし高大を見んとするならば必ず一部分を去つて、全體に眼を注がなければ、到底其真相を見ることは出來ないのであります。

夫れと同じく、偉大な人格に接して居る間は、其偉大なる真相は容易に見ることは出來ないのであります、漸く之を遠かるに従つて、遙かに之を眺むるならば、愈々其大なることを知るのであります。

悲しきことも悉く釋迦牟尼の下に走つたのであります、中には佛陀の教訓に對し其他の多くの問題に對して少しも求むる所がなかつたものもあつたさうでありませう、一度び親とも思つて居た佛陀が八十の滅に入り給ふた時には、非常なる驚きと、悲しみの情に充ちて號泣の聲は河畔に轟いたさうでありませう、俄然、訴へて求むる處を失つた多くの佛弟子は、佛陀の代りに救済の力を他に求めんとしたのであります、何れに於ても此力を發見することを得ずして、終に佛陀の遺經に於て漸く此不安を慰むることが出來たのであります。

そこで彼等が其遺經を見ることは實に活ける佛陀を見るが如く、佛陀の悟りは即ち此經典に止まり、佛陀の御心は即ち此經典に宿つて居るので、吾々は此經典によりて凡ての疑問は解結せられ、淨尊の御心に通ふことが出来るのであるといふ信仰は、纏て法身報身應身といふ、三身論の據つて生ずる淵源であります。

如斯く佛陀の信仰は終に經典の信仰に入つて、佛陀は決して丈六だけの御身でない、此經法は永遠に實在

して是が即ち之れ佛陀であると云ふ觀念より、進んで宇宙の理法に至る迄、皆是佛陀のなす玉ふ處であるといふ思想を生ずるに至つたのであります、即ち法に於て佛陀の感を附與せられたるものが、法身と名けられるのであります、大日の如きは即ち此思想の中に生れたものであります、要するに現身の生滅觀と、法身の常住説とは時代を経ると共に破綻を生じて、一つの疑問となつて現はれたのであります、即ち吾人救済の教主は宇宙真理の佛陀法身如來でない、吾人を教へ玉ふ佛陀は石の如く冷たきものに非ずして、温容玉の如く血あり涙ある佛陀でなければならん、が然し如斯佛陀は存するであらうか、現身（應身）は生滅にして法身は不滅であらうかといふ疑問は千七百餘年の後天台の出現に至る迄、争論の府となつて居つたのであります。

天台は世に出でまして此眞身と應身即ち現身生滅論と法身實在論とを調和して、現身常住説を立てんとしたのであります、終に此の企ては失敗に了つて居る

内容より分類しますれば、佛性を直ちに此現象の上に認めんとする實相論と、是を現象以上に認めんとする緣起論との二種に類つ事が出来るのであります、然し乍ら是等の煩瑣な理論は今の主とする處でありませぬから、私の述べんとする結論の方を申しますれば、

要するに種々なる理論としての問題は、空と假の二偏に傾きたる二諦論より進んで三諦論に來らなければならぬのであります、其の初には空の一片に其の立場を持つて居つた、三論の如きもの迄も唱ふる様になり又地論攝論に於て或は華嚴迄も、中道論を唱ふるに至つたのであります、降つて天台に來つて盛んに又中道論を鼓吹される様になつたのであります、此の天台の中道論は最も統一せられたるものであらうと思ひます、然し乍ら其の大體に於ては華嚴の中道論は假に偏し、天台の中道論は空に偏して居る傾向を免れないのであります、傳教大師が日本に出現せらるゝに及んで是等の二つの傾向を調和統一せんと企てられたのであります、其弟子に至つて、眞言と天台とを主張して

のであります、然し、之を日蓮上人の研究に窺ひますれば、美事に完全なる解結を下されて居るのであります、即ち日蓮上人の法華經に基かれた佛陀觀は天台の見解に一頭地を抜いて、此現身の佛陀が時間を貫いては、無始無終にして久遠より盡未來際に至り、空間を貫いては十方に遍滿して活動教化の土に非ざるなく身を十方に乗じて益を三世に垂れ玉ふ處の佛陀となつたのであります、即ち日蓮上人によりて光顯せられた佛陀論は、本門壽量品に於て現れました處の應身為正の本佛であります、是即ち上人出現の一大事でありまして、理論を貴ぶものなれば鬼も角も、至誠吾人の教主を確立せんとするなれば、此應身為正の佛陀論に來らなければならぬのであります。

以上佛陀論に就きまして史上の議論と日蓮上人の高見なる解結を述べたのであります、

第二に吾人の有する佛性論に就きまして再び上人の高見に接せんとするのであります、勿論佛性論と雖も史上の議論を免れないのであります、大體此議論の

可惜の妙説も支離滅裂となつたのであります、之が日蓮上人に來つて、事體理徳の高判を下されて、理系に屬する議論衝突は、純乎たる信仰に調和統一せられたのであります、日蓮上人に至る迄の究理的の佛教は、恰も儒教に於ける宋學の傾向とも見るべきものでありまして、理論を以て終ることの出來ない宗教は、必ず最後の信仰に入らなければならん、而して日蓮上人の信仰は何れの方面より觀察しても、其缺點を見出すことの出來ない信仰であると信するのであります、眞に偉大なる信仰には、必ず偉大なる慈悲と、奮闘努力の靈妙なる力を起し來るのであります、日蓮上人の最高なる主義も、日蓮上人の偉大なる信仰も、皆其生涯の活歴史に於て遺憾なく證明せられてあると思ひますのであります。

汝等諦聽

(五月廿六日於統一閣)
第一義會講演(大要)

山根 日東

本日は法華經壽量品の一句を講題として少しく所感を述べやうと思ひます、今更申す迄もなく法華經は諸經中王の御經でありまして、壽量品は特に法華經中の魂魄でありまして、而して其壽量品の始に、特に三誡三請重請重請と申す入念の儀式を張られて、佛陀からの仰せには、今より改めて大事の法門を沙汰するににより、汝等須らく如來の眞實語を信解する様と、三度まで誡告を與へられ、大衆の方からも、彌勒菩薩が一會の代表として、仰せの趣決して違背なく神妙に信受し奉ります、何卒願くば説示下さる様と、是亦三度拜請しました、之を三誡三請と申します、斯く改まつた儀禮のあつた其上に、又候一段敬虔の態度を以て、彌勒菩薩より更に重ねて御説法を懇請し奉りました、其聞法の至念堅固なるを見そなはした佛陀は、さらばと計り茲に微妙の音聲を以つて、前古未曾聞の大法を説くべく

を物せられたのは、最も鮮明に這般の消息を説示されたものと領解すべきであります。

然らば其如來出世の一大事とは如何と云に、佛陀の顯本であります、伽耶始成の現身佛に即して、「成佛已來久遠若斯」と其本地を顯示せられたのに外ならぬ聖判に「此過去常顯はる、時諸佛皆釋尊の分身なり」とありまして、先づ一國土に二人の王あること無きが如く、一佛世界に二佛の並び出ることとは斷じてありません、さればこそ經には「唯我一人のみ能く救ひ護ることを爲す」と説かれてありまして、此娑婆世界は實に唯一の釋迦牟尼世尊化益の境域であつて、彌陀の大日だの他の佛菩薩の一指をだも染むることを許さないものであります、次に此現身の佛陀が所謂釋氏の王宮より出で、伽耶城を去ること遠からざる道場に於て成道遊ばしたと、皆人の思つて居る佛陀が、何ぞ知らん久遠無始已來の本佛なりと顯本せられたのである、斯る重大の本義を説示遊ばす前提なればこそ、「汝等諦聽」の森嚴なる御誡告があつたので、さら／＼無

汝等諦聽」と、一語千鈞の力ある重誡を與へられた、之を講經の科段に重請重誡と示されてあります。

「汝等諦聽」如何に權威ある一語ではありませんか、自分は思ひます、天地間何物の權威も、恐らく此一語に及ぶものはありますまい、而已ならず一代經中反覆之を求めましても、斯る神聖不可犯の權威ある佛語は再び見出すことは出来ません、而して佛陀が特に壽量品に限りて、何故に斯く懇ろなる儀式をとられ、何故に斯く重みあり力ある誡告を與へられたかと申しますと、开は佛陀の此世に應現せられた大目的、所謂如來出世の一大事を説き給はんとの思召に外ならない、則ち今や時機は純熟して、四十餘年横説縱論したる百般の教義に結末をつけ、統一を宣し佛陀觀、人生觀、宇宙觀等所有問題に最後の解決を與へ、而も擧ぎ慈和合せ此大良樂を、子に與へて服せしめんとの大慈悲の衝動に外ならぬのであります、日蓮上人が一切經の中に此壽量品をましますば、天に日月の、國に大王の、山河に珠の、人に神のなからんが如し」との警語

理ではありますまい、で此顯本の重より從來所説の佛陀觀と對照研究しましたならば、其處に一月萬影の意義が判明に把握せられまして、成程此過去常住顯はる、時諸佛は皆釋尊の分身散體である、實には唯一本佛の大慈悲のみ、彌陀の樂師の觀音の不動の是迄歸依渴仰を捧げた諸尊は、悉く是れ水中の月影だ、夢中の權化だと、覺めての後は唯壽量本佛の大慈大悲に感泣の外はないのである、宛然舊幕時代に鳥津公が豪いの毛利さんが強い、仙臺侯が慈悲深いのと、各自思ひ／＼の品階をし居つたもの、王政一新萬機陛下の親裁し給ふ聖世となつた今日は、そんな部分の談は全く一場の夢物語と化し去つて、唯陛下の御仁澤に浴せぬ民草は無いと同一に考へて宜しいのであります、若しも明治の今日陛下の神聖を漬し奉るものあらば、开は明かに逆賊の汚名を蒙りて國法の裁斷を受くる外なきが如く、佛教徒にして唯一本佛を忘れ壽量の教主に背き奉るものは、明かに逆路伽耶陀の人非人となるのであります、聖判に「壽量品を知らざる諸宗の學者は畜

生と同じ不知恩の者なり」と決判せられて、一點不服の控訴は微ないのであります。

佛陀の顯本は聞へた、談はもう大丈夫と申すところでない、佛陀の久遠が顯はれると同時に我等衆生も久遠なので、日蓮上人は此事を「佛既に過去にも滅せず未來にも生せず所化以て同體なり」と仰せられた、所化とは我等のことで、我等も其實は久遠劫來常住不滅の本體である、されば人生僅か五十年朝顔の露の乾ぬ間の壽命と思つて居るのは、畢竟凡夫の可卑な量見である、由來壽命の一品は佛壽の長遠なることを詮量せらるゝと同時に、我等の壽命をも常住不滅と確實に裏書をして下されたので之を生佛一如の妙談と申します唯悲むべきは、我等の常住は迷界の常住淺猿しき流轉生死の常住であります、されど若し一朝驕然として此迷夢より醒め、至信に妙法を信受すれば、やがて本佛の壽命海に入ることが出来るのである、更に一段突ッ込んで申しますれば、佛と衆生と互具互融と説くのは、それはまだ必然關係と申しまして、冷たい理論の

本復平癒したものは、妙法を信じて本因妙位に安住せる我等日蓮主義者である、服まぬ失本心者とは、父を忘れ我身を忘れたる罪業深重の一切衆生である、佛子の自覺を喚起して服藥すれば、やがて其處に本壽命海に入り得るので、之を經に更賜壽命と説き深信解相と説てある、念佛門の學者達が頻りと哀れッポイ口調を以て、「大悲の御親」杯と彌陀鼓吹をやつて居らるゝが、何ともお氣の毒な事には、我等と彌陀との間には到底父子關係は成立しませんが、のみならず恩義ある實の親を忘れて他人の親に頭を下げる輕薄兒となるのである、「西方は佛別にして緣異なり父子義成せず」との天台大師の明判の上に、更に「當世日本國の一切衆生の彌陀の來迎を待つは、譬へば牛の子に馬の乳を含め、瓦の鏡に天月を浮ぶるが如し」との日蓮上人の御垂示を見たならば、そんな誑惑極まる誘拐に乗せらるべき筈のものではないが、さて世には失本心の者多く眞實父子の自覺に入るもの、掛なき、眞に愷歎の極みと申さなければなりません。

説明し方で、畢竟迷門の理の一念三千に過ぎない、壽量品は此生佛の關係を、精神的に最も温かき活ける事實の上に説かれたので、これぞ事の一念三千と銘打つて萬年救護の大法門と標榜する所以であります、夫とは父子關係であります、親と子の何とも云へぬ温情であります、佛も久遠衆生も久遠、而して此佛陀と此衆生とは、切つても切れぬ親子の關係あることを説明されたのである、則ち佛陀は我等を救済し給ふ大悲の父で、我等は其佛陀の最愛の子である、「我も亦これ世の父諸の苦患を救ひ給ふ者なり」との經文、實に身に沁みて感讀し奉るべきである、次下に更に重ねて醫師と藥と病子との譬喩を以て、丁寧懇切に示されてある醫師とは無論佛陀のこと、藥とは妙法五字、病子とは我等一切衆生のことである、父なる醫師は病子の苦患を救ふべく、色香美味の大良藥(妙法)を與へ給ふたが素直な子は親の命令通り取て之を服藥して、さすがの難病も悉く除き癒へたもの、毒氣深く入つて本心を失へるものは、何としても之を服ぬとある、服んで

「汝等諦聽」……自分此經文を拜讀し奉る毎に、現に我等の頭上に在す教主釋尊より、此森嚴なる御誠告を拜聽する心地がせられて何とも寒毛凜立の外はないのであります、而して日々夜々に佛子の自覺を強め、本佛の恩寵を感謝し奉りて、信心受持の妙行を賜んで居ります、頭はない二三歳の子供は無邪氣なもので、水を見ても火を見ても、とんと恐れと云ふ感覺が薄いから、随分と焼火箸をも握りかねぬ、溝泥の中にも隨ちかねぬ、夫をば親が後方から附そひ通しに保護する、慈愛の袖の下に漸くにして成長するのである、壽量品の佛陀が無始已來我等を慈愍し給ふことも、宛然此親子の如き有様婆娑往來八千八度とあつて、後方からと衆生を逐ひ廻つて世話を焼き通しに御攝化を遊ばす、之をば術語に隨逐化恩と申してあります、然るに我等は動もすれば其御恩徳を忘れ奉る淺猿しい譯ではないか、隨逐化恩……せめては此四文字丈も忘れぬ様にしたいものだ。

壽量品の如來の誠告に醒めて、久遠劫來佛陀と我等

との父子關係の重大事を講聽したか、否、是れ第一義會の會員が胸に問ひ胸に答へて、少くとも其領解を告白すべき第一義であらうと思ふ、而して新たな壽命を得ねばならぬ新たな光明の生活に入らねばならぬ、若し果して佛子の自覺を眞實に深く堅く把持し得たならば、其處に何とも云へぬ法悦の情熱の涌くと共に、自重の念は益々強く、よし百難來り壓するも從容自若として之を切り開いて、徐ろに向上の進路を辿る事が出来る、日蓮上人が伊東の御流罪に當りて、「人間に生を受けて是程の悦は何事か候べき」と仰せられ、龍の口の斷頭場に坐して而も「是程の悦をば笑へかし物共何とて歎くらん」との給ひ、佐渡雪中の佗住居に「悦び身に餘り感涙押へ難し」と御消息を殘されたのは我等信行の徒が脊々服膺すべき金言と信じます、以上は自分が拜讀しました書品に對する、信解の一端を述べました迄で、時間が來ましたから是で御免を蒙ります。

近代の主義と日蓮上人

三 上 義 徹

近來の流行として主義と云ふ文字が盛んに使はれて居る、凡べて何物にも主義がなくてはならぬ、主義は其自身が歩むべき道であるから、眞に大事なる問題である、天下には雜然として多くの主義主張と稱するものを觀るが、何れも一時的の意義であつて、純乎として眞合正しき一大主義を見出すことが出来ない、而しおよそ主義と云ふならば、一國の風教を確立し名教として之を遵守すべき程のものでなければならぬ、また不偏中正を得て居るのでなければ、現在及萬世の下尙は力あるものと云ない、言葉を変へて言ふならば、個人と國家及現實と理想とを調節したる主義でなければならぬ、此の個人は短かき五十年の生命を有するに過ぎないが、亦同時に絶對無終の生命を有し、之に向て努力しつゝあるもので、この生存せる現在國家を離れて別に新らしき天地はない、従つて吾人は個人の平安向上を

期すると共に、國家の光威を發揮すべき天職を有つて居るのは當然の事である、けれども或る偏狹の宗教に依れば、絶對にのみ向へる心を高めて國家の觀念を薄らぎ、或は小家の病見に捕はれて一國の興亡を思はざるが如き、亦宗教的信仰の一面に没頭し個人の解脱のみ希ふが如きものは、全然個人と國家との調和統一を缺ける病的宗教と論斷せねばならぬ、蓋し是等は、國を思ひ道を念ふの衷情を缺いて居るから、夫が延て以て人格に現はるゝので、是れ實に恐るべく亦誠むべき病的思想である。

日蓮上人は、始めより理路堂々秩序整正、加ふるに燃ゆるが如き熱誠を以て大主義を建設し、直接人生と國家に向つて實現し給ふたのであつて、即ち、

「法華を誦る者は世法を得べき歟」

「若し深く世法を誦らば即ち是れ佛法なり」と仰せられ、この複雑多種なる人生の道義を深く辨ふれば、夫が即ち佛法に當るのであると決し給ひ、宗教の信仰と各種の道德とは分離的地位に在るのではなく

て、全然調和一致して居ることを鮮明にせられて居るのである、さらに國家に對しては、特に卓越せる識見を以て正しき宗教と相俟て始めて建國の大精神を實現すべきものであると宣べられて居る、頃來識者の間に鐵仰せられて居る神ナガラの道の如き、是れ學究的に解決し得らるべきものでない、論難質疑によりて其意義を辨ふべきものでない、必ず不可思議なる宗教の精神に繋がれて居るものであつて、我國家の天壤無窮の生命を見て行くそこに宗教的大精神は存するのでありまして、この精神關係を閉却してはならぬ、およそ人は何れも無限的向上性の靈珠を有つて居る、之が即ち儒教に云ふ所の明德であつて、佛教に説く所の佛性である、この明德佛性を磨いて行くものが本統の人である、明德は人の根本精神で、佛性は之れ宗教の本質であるが、今の學校ではこの不滅の生命問題に就ては少しも教へて居らない、それ故に大菩提心を起して知法思國の赤誠の人が少ない、多くは個人主義に偏し實利主義に傾いて居る、斯様な現状は眞に痛心に堪へざ

る事で、我日本人は、個人銘々(個人)が神子なりとの信仰の一念の上に、皇室の尊嚴なる所以を體すると共に、亦宗教的本質の尊とさを知らねばならぬ、即ちそこに不滅の宗教心の存することが解るので、俯仰天地常に神は吾等の身邊にましますと信するのとき、必ず天地の間には至公至大なる生氣あるを知るに至る、而して進んで大なる人格的存在を信せざるを得ない、この人格的存在の如何なるかを知らずして、國精を啓發し人生を指導せんとするは、即ち之れ得べからざる事で、上人が熱血を灑いで論敵を鳴らした主張點は蓋し茲に存するのであるが、即ち此の大人格は、活ける法華經に現はれて居るのであつて、上人は法華經を心讀し色讀せられ給ふたのである、故に上人の活動は法華經の精神である、それが即ち大人格の活動である、而して其活動は極めて大に廣い、現實と理想との兩界に連鎖を有つて居る、吾人は現實を尊重すると共に、つねに高き理想に向つて信念を捧げねばならぬ、今目前の事實によりて云ふならば、こゝに一人の人が歩むに付い

て見るも、一步は地に就き一步は上げて行くと云ふ様に、始めて進むことが出来るのと同じ意味合で、安立の地步と進取の氣力と相俟て始めて目的を達するのである、即ち現實と理想との調節は極めて大事であるが、世の多くは現實に囚はれて、神を認めず、佛を知らず、永久の生命自己の存在と云ふものに思ひを致さない、唯だ一面の觀察による皮相形式に流れて居る我日蓮上人の主義は斯かる淺薄偏狹なるものでない、一切の方面に對して正明の識見を以て適當に調和を圖られて居る、故に日蓮主義は、現實主義に陥りて理想を輕視し、又理想にのみ馳せて現實を蔑視するものでない、之を國家の上に見るも、物質文明の進歩を計り尊重すると同時に、精神的に於ては、俯仰天地に恥ぢざる高等模範の程度に進み、物心兩面共に適當なる安排を施して行かねばならぬ、即ち日蓮上人は

『世間を捨て、佛法あるべからず』

『世間の爲にも佛法の爲にもよかれかしと屬むべし』と仰せられて世出兩面の調和を圖られて居るが、更に

一段強き力ある文文字は、一昨日御書に仰せられたる『法を知り國を思ふ』と云ふ聖語である、誰れでも此御書を拜讀するならば、自から壯大の感に打たれて肉躍り、愛國の熱涙に觸れて血鳴らざらんとするも得ないのである、即ち上人は、宇宙絶對の根本大法を體知する信仰の發現は、之れ正しく國運進歩の大精神であつて、また健全なる國家の發展を思ふ誠衷は、知法の源泉より湧き出づるものであると絶叫せられたのである、斯の如く截然たる理義に依りて法と國との調和融合を主張せられ、正面より堂々乎として國家觀を發表せられて居るのである。

又宗教教義に於て、單に未來觀に捉はれて現實を輕視するものは、即ち自己存在の意義を滅却するものであると述べられ、未來偏重の病弊の思想に對しては、痛切なる論斷を下して誤れる思想なりと責め、

『極樂百年の修行は穢土一日の功德に及ばず』

と喝破し給ひ、此人生に在りて教に憑り道を重んずると云ふ道義的行爲は、極樂に往生して百年の修行をするよりも遙かに勝て居ると宜べられて居る、吾人は時

間の疑かい穢れたる人の様ではあるが、けれども人それ自身には佛性と云ふ尊いものを宿して居るのであるから、理想的に考ふれば天下何物も恐るゝに足らないので、日蓮上人は自ら常に蓮を以て理想となし給ひて、

『谷の池を不淨とさらば蓮をとるべからず』

と徹底し開顯せられたのである、いま吾人もこの濁濁せる人生の泥池に立脚し、然かも超然悠々として敢て悲觀の念を離れ、つねに光風霽月の襟度のあるでなければならぬ、いかに根は泥の中に在りても蓮自體の複郁たる清香を放つが如く、佛性存在の自覺によりて菩提の一念發起し來るのとき、自己なる小我は已に絶對の大人格と一致し、現實の我は理想の大我と融合せられて居るのであつて、菩提の向上性は常に理想の大我に接觸せんとして進みつゝあるものである、されば亡ぶる小我に迷を起して不滅の大我を忘れてはならぬ、今の多くの宗教は、不滅の我を説くの時現在の小我の價値を卑らし、また現實を説いては未來を蔑視するの傾向を存するも、何れも穩かならざる思想である、宗教は個人の平安と光明とを與ふるは勿論であるが、其

平和満足の精神は國家的觀念と結付たものでなければならぬ、いかに個人に満足と云つても、其信仰によりて燃ゆるが如き愛國の至情を缺いて居つては宗教の本義に背くものである、上人は斷頭場裡の露と消えんとする刹那も、この國を思ふ赤誠が溢れて居る、北海風寒さ佐島に請居の身にありながら、「日本の柱とならん」との大抱負を述べ、「日蓮が流罪は今生の小苦なればなげかはしからず後生には大樂をうくべければ大に悦ばし」と仰せられて、無限の法悦に住し満足に充ち、現實と理想との融合接觸を認められて居る法華信仰に活けるものは皆斯の如くである、日蓮主義は即ち是である、法華經は人類行為の基準を説けるものであつて、亦實に人の身其まゝを説明せるものである、活ける力ある經典である、故に法華經を色心二法に亘りて實行するならば、そこに燦然として光明は輝いて来る、歡喜の情は湧いて安忍と満足とを得るのである、日蓮主義は現實に流れず理想に走らず、個人の向上性を尊み國家の威嚴を重んじ、一切の問題を包容し融合し統一するの妙致を有つて居る、而して無限の光明と絶對の活力とを國家人生に與ふる、それが即ち日

吹大法螺

聖祖門下在京
雜誌記者會

一人の心なれども二の心あれば其心たがいて成ずることかたし。百人千人なれども一つ心なれば必ず事を成す、日本國の人々は多人なれども體同異心なれば諸事成せん事かたし、日蓮が「類は異體同心なれば、人々すくなく候へども、大事を成じて、一定法華經ひろまりなんと覺へ候。

聖訓として聲あり、誰人か誤て體同異心の醜態を呈しこの嚴訓教示に逆くものあろうぞや、日蓮主義者は雄大なる闊浮統一の理想に活きて、國家及人生に光明を與へ啓導の大任を負ふもの也、漫りに妄見我執を構へて、徒らに遊戯雜談のみして明し暮すが如きは、上人の所謂二陣三陣打つべくき若黨共の資格を存せざるものと謂ふべし、上人の「人々すくなく候へども」との文意は、吾人の全力を凝いで心讀し色讀すべき大文字也。

おもふに吾人の天職は重く且つ大也、大事は異體同

蓮主義である、日蓮主義は法華經主義であつて、之を實現したのは日蓮上人である、上人一代の大活動は法華經の體現であつて、即ち全體の教義が眞實であることを立證せられたのである、上人が大主義の爲の奮闘は、いま現に激濁として活ける靈聲を發し、この大主義宣傳のために殫れよと激勵を與ふるものあるを覺ゆるのである。

今や日蓮主義は、天下識者の間に熱心に研鑽せられて居るので、正に近き將來に於て、「日は東より出でて西を照す」との上人の仰せの如く、「末法萬年の外未來までも流布すべし」と言へる本化の大豫言は、當然の運命として實現せらるゝこと、信する、而して斯かる時代に到達するのときは「日本國一時に信する事あるべし、その時は我も本より信じたりと申す人こそおほくをばせすらんめとおぼる候」と宜べられたるが如く、歡喜法悦に充てる本時の寂光土が現はるゝこと、思ふあゝ主義なくして人生を論じなほ其行路に惱めるものは卓越せる日蓮主義に接して之を聴けあゝ主義なくして國家を談じ哲學を語るものは、速かに日蓮主義を鑽仰せよ。

心にあらすんば達すること至難也、苟も日蓮主義者たるもの思をこゝに致さるものあらんや
時代の機運は熟せり、今正に其時也、聖祖門下形式教團の統一は之を知らざるも、精神的に融合統一の實は近き將來に現はるゝなるべし、いぬるさつさの中はころ、在京聖祖門下雜誌社同人は、統一閣に相會して佛子としての親交を温め、互に一國風教の頽廢を論じて思想の危機を愾き、日蓮上人の卓見と理想信仰とを語りて同人の所信を固め、議熟して異體同心の聖意を色讀し、在京聖祖門下雜誌記者會成る、

大日本聖祖門下在京雜誌記者會

- 一 闊浮統一の大法螺を吹きあぐる事
- 一 大に心やすくする事
- 一 會合場所は統一閣とする事
- 一 毎月第三土曜日午後四時に集まる事
- 一 晚餐會費金一圓を持て必ず集合し全部食ひ終りて残さる事
- 一 缺席するも會費は差出す事

以上の行事は萬丈の氣焰を吐きつ、拍手聲裡に即決し次で同人は佛陀の御聲に聽き、異體同心の實現として

聯合大講演會開催を議せしも、萬歳歡喜の聲に迎へられて、思想革新の聖業に勇むべきを誓ひた々に大講演會は本誌掲載の日時場所に於て各社より記者代表とし講演壇上に獨特の廣長舌を振ひ、即ち行事第一項に約したる闊浮統一の大法螺を吹き鳴らすことにさだまりぬ時なる哉、時なる哉。

上人撰時抄の冒頭に説いて云く
夫れ佛法を學せん法は必ず先づ時をならうべし
又云く

智の賢さにあらず時のしからしむるところ也



見聞餘録

△佐藤大佐の講演はいつも内容豊富條理整然たるもので其所信を發表するに少しも遠慮がない、小問題でも縱横より觀察を下して、長所あらば之を提へて大に賞讃するが、突如一轉して弱點に突進して止めを刺すと云ふ論式で聴くものはアツと云ふのみでアツの音の出し様もない、蓋し之は戦ひの機微であるうか、今の學說紹介の學者には眞似たも出来なないが、之れ大に學ぶべき所であるとおもふ。
△天晴會例會の集りは何れも天下の名士であるが、六月の例會ほど軍人の多かつたことはない、上村大將宮岡中將八代中將松本中將川島少將中山少將有馬少將松本少將佐藤大佐の海軍側と陸軍側より小原少將菅波大佐の諸氏で其俗氣のない悠然たる態度は何となく心もちがよい。
△天晴會員伊東知也君云く、今回山形縣の郷里で衆議院候補者として政見發表の演説會を催ふしたが、他の壓迫をうけて堪へない程であつた、而しいつも其時には「日蓮上人」なみに「屬するな」と云ふ、清き力ある聲が頭に身に沁みわたるほどに響た、自分は其たびことに壓迫も苦痛とは感じないで運動をしたが、遂に最高點で當選することになつた、之は郷里の志士の同情ではあるが亦平素上人を敬慕することから何かの實力が下つたのではあるまいか。
善哉善哉君幸に自重して正義の道を行き給ひ經文の如くんば諸天之を衝らむ。

法鼓

東京天晴會

六月八日午後四時より帝國大學橋内御殿にて例會講演は開かれた本會は回を重ねることに名士の入會するもの多く亦一面には極めて熱心なる態度を以て研鑽するものを出だし競ふて日蓮主義の特長或は理想に到らんとして何れも氣宇の昂れるを見るので何とのう壯快の感に打たるものがある會するもの五十餘名であつて定刻幹事の開會を宣するや佐藤海軍大佐は「國民教育及宗教に就て」と題し今の教育宗の識見專して宗教を見るの明なく徒らに宗教を論議するは誤れるものと云ふべく宗教家も亦教育の効果を尊重して敢て輕視する勿れと詰め日蓮主義は國家教育と一致調和し道徳をして活力あらしむるものなりとして堂々風發の論陣を構へて聖語を引證し一時開會に亘る大講演を終り本多大僧正は「宗教心と日蓮主義」と云へる講題を掲げて登壇し開口一番天下の教育家政治家が宗教不明の失を責め宗教の人生に必知なる所以を説き宗教心の六大要素たる感應實在神秘悔道義推理の思想を説明し日蓮主義は此の六大要素を完全に備へて圓滿なる宗教心の啓蒙をばはるものであることを述べ經文佛書を引いて之を證し其系統の靈光は聽衆の心田に輝き渡るを見うけられた講演が終ると晚餐會は開かれ上村海軍大將は本多大僧正と相對してナイフ

地明會

を取りつゝ上人の偉大なるを嘆賞し歡びの情眉宇の間に現はれて居つた宴半ばにして矢野幹事の會務報告と尚船學校教授小關三平君の入會を介し次第で姉崎博士は川島海軍少將の任務を了へて歸れるを迎ひ一同乾盃を舉げて健康を祝し川島少將起て挨拶を試む云く「自分は修養信仰の上にて於て諸君の末尾に附くことも得ないものであるがこの法の集りの席に只今の御言葉頂きまことは幸榮の次第に存じます一新く軍艦にして意ある答辭を爲し食堂に撤せられて談話室に移るや姉崎博士は會員伊東知也君の衆議院議員當選の榮譽を擔ふたるを紹介し伊東君は政見發表のため會場借入等に困難したる二三を語りて挨拶の辭を終り會員の歸途に就いたのは上野の總堂午後十時を轉するときであつた。

六月九日午後一時半より統一閣樓上に開き本多大僧正導師の下に地の明かなるべき法會を行ひ菅川布教師は法華に現はれたる女性の性と題し支那思想に現はれたる女性の觀察を述べさらに法華經に發揮せられたる三種の女性の徳相を詳論して女性の地位を自覺せしむるものかあつた本多大僧正は「人身觀」の前講に續いて物欲の満足を得んとして佛性の開發を思はざるは恰も極大の土壤に敷むるゝに同じく十界内の四趣に止まりて菩提の一念發起せざるは憐むべきものなりと引例該博平易懇切に之を説き多大の感化を與へて散會したりき。

第一義會

五月二十六日午後一時より開會參聽者百餘名山根僧正は本誌掲載の講演を爲し本多大僧正は三輪の妙化に就て佛陀の常性不滅より説き起して衆生救済のための應現の身輪や轉法輪妙益の口輪や慈悲無限の意輪について痛んで含めるほどに懇誠し未聞の聽衆多かりしため其効益夥からざるものあつたに相違ない超へて六月二日午後一時半より例會を開いた聽衆百六十餘名山川顯律師は宗教と家庭との關係について家庭に宗教の大事なる所以を説いて日蓮主義を奨め關田養叔師は日蓮主義の使命と題し紛亂難然たる現代の病根の如きは日蓮主義により開顯調節を圖り國民の向上と國運の隆昌を期すべきなりとの所以を論じ其抱負理想の一面を説いて日蓮主義の最高を示したので何れも精神の悦びに充ちて即時に入會するもの十數名を出だしたげに會とい集りであつた。

思恩教林

六月五日午後七時より例會を開いた講師には野口僧正五島子爵山根僧正の名士各其所信と懇誠による講話を爲し人の心に處する道や信仰の悦びに入る道程や亦自己一身の精神修養の方法などについてはいとも懇ろなる説き明しありて益する所多かつたことを見る。

信教川品

五月十二日午後二時より妙蓮寺に於て正法護持會の講演を開演す石川顯隆師は化城喻品を引用して釋尊の崇高なる靈格を述べ兼川寛行師は當體蓮華の妙用を述べて法華信行の活力を説き兼川眞摩師は本化の本領精神行爲を從地涌出品を擧げて宣示せられたり

五月廿九日午後二時より妙蓮寺に於て第十回養徳兒童會の催しあり例によりて山根征川兩師の有益なる訓育談あり會する兒童と與ふ精神上の感化は會毎にその功益の空しからざるを認められていとも悦ばしきことなり

五月廿日午後七時半より妙蓮寺に於て交親會の講演あり征川師は救戒の所行安穩快善なりとの經文を引いて述べ今成師は事常住の要義を細説せられたりこの會には會員已外の聽衆多く見受けたり求道の要求が如何に渴望せられたりあるかを證するに足る

五月廿七日午後二時より本光寺に於て經王會の講演あり石川師は本佛の靈光と信仰獲得の功能を述べ今成師は佛子得道の絶待益を示され征川師は法華華嚴の優劣を述べてその行者の相違點を兩經の文相に準照して舉證せられたり

報教都京

五月八日午後二時妙蓮寺に於て持寄講を催し川崎英照石井寛後師一場の修養談をなし十三日午後一時より法要を修し石井師の説教あり十九日午前十時より京都林誠一氏邸に於て京都大原天晴會主催とし

Table with columns for amount (e.g., 金五圓參拾錢), date (e.g., 全), and name (e.g., 石橋 橋). Lists various donations and their recipients.

Table with columns for amount (e.g., 金五圓貳拾錢), date (e.g., 全), and name (e.g., 草切 榮). Lists various donations and their recipients.

Table with columns for amount (e.g., 金壹圓五拾錢), date (e.g., 全), and name (e.g., 加藤 野). Lists various donations and their recipients.

各地天晴會幹部大會を催す其協議條項は各地天晴會の連絡を計る事講師招聘に關して連絡を計る事月刊雜誌發刊の件毎年一回各地交代に大會を催す事等に於て京都大阪神戸大津姫路等より集れる幹事二十名に於て頗る熱心に協議し三時終つて林邸の庭園に於て紀念撮影をなしそれより新園中村樓に懇親會を催せり東京新瀉等の天晴會よりは出席し能はざるも賛成の辭を寄せられたり而して不日京阪神代表委員を出し東京天晴會に交際し諸般の協議をなす苦に誠にお力なる會合なりしが十九日夜は妙蓮寺に例會の演説を催し加藤謙靜氏は開會を告げ石井寛後師は日蓮聖人の信仰を題して聖人一代の聖業は其堅固なる信仰より發したる事を述べ銀井乾升師は統一の大本尊を題して誤れる本尊は世を害し人を解し入るものなりと説破して法華經の統一的本尊を主張し川崎英照師は汝自身を知れの下にソクラテスが此の格言を一生の知れとして修養せしに論を起し聖人の總論文抄に違つたる八四子の法藏は我一身の日記文書也の文及び方便品の開佛知見等の文證を擧げ日蓮主義は一面に此大自覺なるべからずと論じて九時半閉會せり

會津妙法寺本堂再建 寄附金領收報告(第八回)

Table with columns for amount (e.g., 金壹圓), date (e.g., 全), and name (e.g., 飯坂 昌). Lists donations for the reconstruction of the Honjo Hall of Myohoji Temple in Aizu.

會津教信

信徒團隊の靈體巡拜 四月十二日如法修行連と稱する東京千住井上鎮吉中島常之助爲成草太郎安室屋造諸氏の一隊三十有餘名は什祖靈誠の靈蹟なる本山會津妙法寺に參拜せられ竹内副住職は一隊の爲に御本尊に法珠を捧げさらしに信行の要義を述べて理想と現實とを調和せざる信仰を勤めらるる同寺は目下本堂再建造作工事中なりしかば井上中島爲成安室諸氏は若干の工費を寄附し夫れより一隊は佐渡聖祖の靈蹟を巡拜する者なりと云ふ尙ほ井上氏は釋尊一切經五時の異別印刷物及び祖先五十年忌の折り江湖の信徒に分布したる菩提のしをりを當地同信の徒に配布せられたりとして同寺へ數十部を依託せりと井上氏の如は現代稀有の正信士と云ふべきなり (會津若松報)

今回。廣宜流布の大願を立てんと。の聖祖の嚴訓に則り。各地巡教候處。何れも未曾有の盛會を呈し。歡喜に不堪候。爰に各地士女の信仰上の色讀に對して。謹て敬意を表し。併せて御禮申上候 合掌

六月十五日

監督布教師 能仁事一

布教師 朝倉俊達

茨城縣。栃木縣。青森縣。岩手縣。山形縣。北海道

各地信行衆中

宮殿●須彌段

前机●幢幡

御來店の節は陳列場へ御來車被下度是れ迄とは一層勉強仕一切各宗の佛具陳列仕置候

正價三法堂佛具發賣目錄

注意

佛具と唱すれども此の種類數品有之候を以て一々記載する能はず。依て特に佛具正價發賣目錄書を作製致置候に付御入用の諸君は。郵券四錢附送附發賣目録書を迅速呈仕候。此の目録を御覽あれは。寺院機方の御入用品一切の買物何程遠方でも坐ながら買物安價にて早くとせ御覽あれ其の正價附の品は左の通り



佛具卸部 京都市三條 本舖 三法堂藤田總次

小賣部 同市三條 通大橋西入 三法堂佛具陳列場

大僧正本多日生現下著

橘香集

大僧正本多日生現下講述

法華經講演集

序說 如來壽量品

本書は佛陀觀宇宙觀人身觀等の絶對開顯統一の意義を闡明にし本佛の大慈活躍し日蓮主義の光輝燦然たり日蓮主義者の一讀を薦む

毎月一冊十五日發行、一部金六錢、郵税五厘、一ヶ月前金六拾五錢郵税六錢、代金、振替貯金口座東京一、二、三番へ拂込マレ、此場合ニハ、送料ノ外ニ金壹錢ヲ添付相成度候

明治四十五年六月二十日印刷發行

發行人 井村日成 編輯人 山根日東 印刷人 鈴木日雄

發行所 統一團 東京市淺草區北清島町十四番地

七月二十日午後六時三十分開會 於淺草北清島町統一閣
七月二十二日午後六時 開會 於日本橋橋詰常盤木俱樂部
七月二十一日午後六時 開會 於神田橋和強學堂

日蓮主義大講演會

講 師

日宗新報記者。法の響記者。統一記者。活宗教記者。
大獅子吼記者。村雲婦人記者。布教記者。めぐみ記者。
妙教記者。師子吼記者。(參聽無料)

主 催 在 京 聖祖門下雜誌社

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可(毎月一回)
昭和十五年六月二十日發行第一號二百九號(十五回)

(東京 三協印刷株式會社印刷)

統一

第 二 百 九 號

修養上に於ける偉人の研究

權僧正 能仁 事一

國民教育及宗教に就て

海軍大佐 佐藤鐵太郎

信念の統一と發動

大僧正 本多日生

凡人と非凡人

文學士 小林一郎

各地活動史

